

第6章 外国語科の取り組み

I 昨年度の研究概要

1・2学年を中心とした授業の中で、「文法語法の力」を「規則やパターンに関する知識の有無を問う問題に正解する力」という考え方から、「得られた知識を使う」という観点に結びつけた授業展開を12月の観察授業で見られたことが大きな成果である。例えば前置詞＋関係詞の項目では、習得事項を活用して、「自分の行ってみたい国」を説明する1文を書かせ、口頭発表させる授業展開がされていた。

課題としては、文法・語法に関する項目を、パターンと機能の両面に着目させるようなコミュニケーション活動を授業の中に取り入れなければならないことが挙げられた。

II 平成25年度センター試験の分析結果から

本校生徒が受験した平成25年度センター試験の文法・語彙・語法分野の正答率を集約した。その結果を次に示す。

第2問	文法・語彙・語法問題番号別正答率									
問題番号	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
正答率 (%)	64	53	58	68	60	80	81	67	66	51

問題番号 8～9 代名詞の語法 10～12 助動詞 13 動詞の語法 14 前置詞
15～17 語彙・イディオム

この分野の平均正答率は64.8%であった。問題15～17は、語彙（イディオム）量の不足が原因で日常的に反復演習が必要である。8～9については、知識の有無よりも、英文が示す具体的な状況と組み合わせ、比較検討する力を問うている。英文が示す状況を的確に把握し、個々の知識と総合できる力が身に付いていないことが原因である。単なる知識の暗記から、考えて使う授業展開が求められている。さらに、この分野の向上が「内容を読み解く力」に繋がっており、長文読解や英作文の得点率アップになる。

III サブテーマの設定と研究授業に向けての授業観

以上のことから、今年度の英語科の研究サブテーマを、「自己表現力を伸ばすための指導の工夫」とした。ここでいう「自己表現力」とは、各項目の単純な暗記ではなく、既習事項を用いたコミュニケーション活動を通して、事項の定着および『使える英語』>『受験英語』という構図を生徒に体得させることである。「文法・語彙・語法の力」を基に、リーディング・ライティング・リスニング力の向上、さらに自己表現力の向上に繋がる指導法を工夫する。

IV 外国語科研究授業学習指導案

1 日 時 平成 25 年 11 月 7 日 (木) 第 5 限

2 場 所 第 2 学年 3 H 教室

3 対 象 普通科第 2 学年 3 H 41 名

4 単元名
Lesson 18 関係詞－1

5 単元について

(1) 単元観

本単元と次のLesson19では関係詞を扱っている。日本語には英語の関係詞にあたるものがなく関係詞を含む構文は複雑になりがちなので、その使い方を理解するのは難しく時制・仮定法と並んで、生徒の一番苦手とする文法項目の一つである。

本単元では関係代名詞の基本的用法、すなわち主格の**who**と**which**、所有格の**whose** 目的格にあたる関係代名詞の省略、及び先行詞を含む関係代名詞**what**の用法を、英文を作っていくという作業を通して生徒に再確認させていきたい。

(2) 生徒観

全体的に見ると、意欲的に授業に参加し、指示したことに対しては真面目に取り組む生徒が多い。また音読活動にも熱心に取り組み、ペアでの音読活動では互いに協力しあいながら、相手に伝わるように読むことが出来る。一方、語彙や文法の習熟度に関しては生徒間での開きが大きく、基本的な項目が理解できていない生徒も少なくない。コミュニケーションを図ろうとする意欲はあるので、ペアワークやグループワーク等、間違いを恐れなくてよいような活動を盛り込みたい。

(3) 指導観

主格の関係代名詞に関しては、中学で既習であるためか割とよく理解できているようである。一方、所有格の**whose**に関しては1学年の『英文法演習』の時間に習ったものの馴染みがないせいか、今ひとつ使いこなせていないようである。また、目的格と所有格の区別がついてない者も多いようである。どのような場面で関係代名詞を使うのか、またそれぞれの「格」をどう使い分けるのかを押さえ、自分の思っていることや、周囲の物事を英語で説明できるようにつなげていきたい。

6 単元の目標

目 標	評価の観点
<ul style="list-style-type: none">・ 英文を積極的に音読しようとする。・ 間違いを恐れずに、口頭によるものを含め、英作文に取り組む。	関心・意欲・態度
<ul style="list-style-type: none">・ 基本例文をもとにして、口頭での簡単な英作文が出来る。・ 場面に応じて関係代名詞を用いた表現が使える。	表現の能力
<ul style="list-style-type: none">・ 関係詞の主格／所有格／目的格、先行詞を含む関係代名詞についてその違いを理解し、使い分けることが出来る。	知識・理解

7 単元の評価規準

(A) 関心・意欲・態度	(B) 表現の能力	(C) 知識・理解
[言語活動への積極的な取り組み] ①英文を、積極的に音読しようとする。 ②間違いを恐れずに、口頭によるものを含め、英作文に取り組む。	[適切な表現] ①基本例文をもとにして、口頭等で簡単な英作文が出来る。 ②場面に応じて、関係詞を用いて自分の考えや身の回りのこと等を表現することが出来る。	[言語についての知識] ①様々な関係詞の違いを理解し、状況に応じて使い分けることが出来る。

8 単元の指導と評価の計画（全2時間）

次	学習内容	評 価				
		関	表	理	知	評価の観点・評価規準
1次	教科書p. 46 ・ Study Pointsの例文と関係詞の説明 ・ ペアワーク ・ Exercisesおよび補充問題による学習内容の確認	○				・ 例文を積極的に音読しようとする。 ・ 様々な関係詞の違いを理解し、状況に応じて使い分けることが出来る。
2次 公開 研究 授業	教科書p. 46 ・ ペアワーク ・ グループワーク ・ 発表	○	○	○	○	・ 例文を暗唱することが出来る ・ 基本例文をもとにして、口頭での簡単な英作文が出来る。 ・ 場面に応じて関係詞を用いて、自分の考えや身の回りのこと等を表現することが出来る。

9 本時の展開

(1) 本時の目標

- ・ 基本例文何度も音読することによって暗唱する。
- ・ 暗唱した基本例文をもとにして、単語を入れ替えて口頭での簡単な英作文が出来るようになる。
- ・ 様々な関係詞の違いを理解し、自分の考えや身の回りのことを表現する際に適切な関係詞を使い分けことが出来る。

(2) 本時の評価規準

- ・「話すこと」の言語活動に積極的に取り組んでいる。
- ・基本例文をもとにして、口頭での簡単な英作文が出来る。
- ・様々な関係詞の違いを理解し、的確な格の関係詞を選んで、自分の考えや身の回りの事を表現できる。

(3) 学習の展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価の基準 (評価方法)
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶 ・本時の目標を確認する。 <p>○基本事項の確認</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係代名詞の種類と使い分け方を再確認する。 	<p>「学習した関係詞についての知識をもとに、自分の言いたいことを関係詞を使って表現できるようになる」ことが、本時の目標であることを伝える。</p> <p>一方的に説明するのではなく、要所所で生徒に問いかけて答えさせる。</p>	<p>【知識・理解】 関係詞の種類と使い分け方を理解している。</p>
展開1 10分	<p>○基本例文をもとに練習</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Study Points の例文を全員で音読する。 ・ペアワークで交互に音読することを通して暗唱していく。 ・列毎に指名して暗唱した英文を言わせる。 ・もとなる文と一部が異なる日本語を与え、口頭で英作文を 	<p>例文の日本語をそのまま言うのではなく、英文に置き換えやすいように語順を入れ替えたり、目を閉じさせるなどして段階的に暗唱させる。</p> <p>口頭だと緊張するため、生徒に無理のないよう、一部の単語を置き</p>	<p>【関心・意欲・態度】 英文を積極的に音読しようとする。 (活動の観察)</p> <p>【表現の能力】 基本例文をもとにし</p>

	させる。	換える程度に留める。	て、口頭での簡単な英作文が出来る。 (活動の観察)
展開2 33分	<p>・5～6人を1グループにし、ある人や物について、関係代名詞を使って説明する文を複数作らせる。</p> <p>・グループの代表者が前に出て作った英文を読み上げ、他のグループは、それが誰(何)を表すかを当てる。</p>	<p>説明の対象人(物)を選定するのに時間がとられないよう、あらかじめこちらでカード等を書いて準備しておく。</p> <p>机間指導をして適宜支援する。</p> <p>関係詞を使うと、対象の人や物について、より詳しい情報を盛り込むことができることを実感させる。</p>	<p>【表現の能力】 関係詞を用いて、自分の表現したいことを英語で表すことが出来る。 (活動の観察)</p>
まとめ 2分	本時の振り返りと、課題の指示		



IV 研究授業後の取り組み

1 研究協議について

研究授業を終えて、協議された内容の一部を次に示す。ここではコミュニケーション活動を通じて文法知識の定着をはかる学習における留意点について話し合われた。

司会（ 畝川 ） 記録（ 盛井 ）

<p>授業者より 指導の工夫等</p>	<p>どのような場面で関係代名詞を使うのか、またそれぞれの「格」をどのように使い分けるのかを押さえ、ペアワークやグループワーク等、間違いを恐れなくてよいような活動を盛り込むことによって、自分の思っていることや伝えたいことを積極的に英語で説明できるようにする。</p>
<p>協議・助言等の内容</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ ペアワーク・グループワークを通して、生徒一人ひとりが活動する機会を得ているところがよい。 ・ Three hint quiz を通していつのまにか文法事項を身に付けることができている。しかし、中学校でも three hint quiz は今では当たり前に行っている。もしかしたら同じことを何度も繰り返している可能性もある。 →3年間を見通した計画を立て、それぞれのレベルにあった活動を行うことが大切。 ・ 教科書の音読や暗唱を通して、しっかり input し、その後ライティングやスピーキングなど4技能をフルに活用している。 ・ 英語で授業をすることの意味・・・英語を手段として用いることで、生徒が英語を使用する機会を増やすことができる。 ・ もう少し関係詞を使って、複雑な文を作らせるような発問をしてはどうか。→高校生としてのレベルアップをはかる必要がある。 ・ 生徒の文法知識を定着させる方法として、生徒自身に文法を説明させるという方法がある。自分が分かっていることを他者に説明することによって、自分の中に落とし込むことができるのでは。 ・ 暗唱をさせる活動は、家でもできること。学校では授業でしかできない活動をしてはどうか。生徒同士で考えてきた文章を share するなど。 ・ 英文の採点などの際には明確な評価基準をつくとよい。ポイントをしばって、生徒をほめるポイントをつくるのが大事。ほめることで自己表現の意欲をあげることができる。

今後の課題	<p>英語の教員それぞれが挙げていた課題として、なかなか日々の授業の中で、物事を論理的に考え、日本語・英語両方で自分の意見を表現させる機会がとれていないという点があった。平易な文章を書く、話すということも難しいという生徒もいる。また英語の必要性を今現在の生活の中で感じていない生徒も多いため、授業の中でいかに、必要に駆られるような機会を作るかということも課題である。何のために外国語を学んでいるのか、「他言語で自分を表現できる」というのが私たち教員の最終目標であるということをもう一度確認する必要がある。</p> <p>本校での「自己表現力」とは、どのような定義なのか。自分の考えや思いを伝える活動は入っていたのか。それをどのように授業に反映させることができるか。英語科全体で考えることがこれからの本校での教育活動を続けていく中で必要であると考えている。</p>
-------	---

2 ポスト研究授業について

研究授業後、「自己表現力を伸ばすための指導の工夫」のテーマで引き続き授業改善に取り組んだ。次の例は、コミュニケーション英語Ⅰの科目で生徒によるプレゼンテーションを行ったものである。

<p>科目名【CEⅠ】 授業者名【吉田・カーリー】</p> <p>平成26年1月23日木曜日 5限 授業クラス 1年7H(20名)</p> <p>研究主題 サブテーマ等【自己表現力を伸ばすための指導の工夫】</p>
<p>1. 授業の流れ(導入, 展開, まとめ)の概要</p> <p>最初に旅行についての動画をみせ、旅行にはいろいろな目的があることを理解させた。</p> <p>今回のプレゼンテーションの目的や方法を説明し、発表するグループや発表する国を選んだ。その後先生が見本の発表を行い、次回はコンピュータ室を利用して情報検索をすることを説明した。</p>
<p>2. 工夫した点(研究主題より)</p> <p>動画を利用し、生徒に旅行に対する目的を明確化させる。</p> <p>それぞれの国の特徴が生かせるように、あらかじめ調べるポイントを提示することで分担して作成ができるようにした。</p>

3. 工夫した点がどうであったか。

旅行の目的を動画で示すことは大変よかったと思う。単なる観光地の案内ではなく、それぞれの国の特徴をとらえて発表するように的確な指示ができていた。

英語での説明ではあったが、生徒からも積極的な反応があり、効果が期待できる。

4. 自由意見（研究主題より）

海外のさまざまなことを学習するのに大変役に立っていると思う。学年末の発表のあとのフィードバックをどのように行うかがポイントになると考える。

VI 今年度の研究を終えて

昨年度の外国語科では、「文法・語法の力」を「知識の有無を問う問題に正解する力」から「得られた知識を使う力」と捉え、学習した語法をパターンと機能の両面に着目させたコミュニケーション活動の展開が課題となった。

今年度は、「自己表現力を伸ばすための指導の工夫」を研究課題とし、コミュニケーション活動を通して語法の定着をはかり、自己表現力を伸ばす指導法の工夫に取り組んだ。

研究授業後の検討を経て実施したポスト研究授業では、コミュニケーション活動の1つであるプレゼンテーションにおいて、自己表現力の向上を目指した。生徒に原稿を動画やコンピュータを利用し、さらにALTによるサンプルプレゼンテーションを基に制作させた。また、情報検索の方法や調べるポイントの提示により、メディアによって表現された情報を課題に応じて取捨選択してまとめさせるように取り組んだ。文法については、コミュニケーションを支えるものとしてとらえ、当該文法を実際に用いてプレゼンテーションを行うことによって、文法をコミュニケーションに活用することに力を注いだ。これに対して、授業観察者からは、「メディアを活用することは、海外の様々な事象をトピックに取り入れる場合には必要不可欠である。」「プレゼンテーションを通して表現力を育成する過程で、特にスピーキング、ライティングの向上に役立つ。」「実際に習得した語法を使うことで、定着をはかることができ、生徒のモチベーションの向上に繋がる。」「相互評価の方法について今後検討が必要である。」などの意見をいただいた。

こうした研究授業は、私たちの中にある文法・語法の力を問題に正解する力からコミュニケーションを通して自己表現力を育成する力と捉える視点が生まれたという点で成果が挙げられたと考えられる。しかし、日常の授業の中で、文法事項をコミュニケーション活動の中で定着をはかる場面をもっと構築していかなければならないという課題がある。小テスト等を反復することのみで定着を図っている現実がある。

今回の研究授業・ポスト研究授業から、コミュニケーション活動を通して、文法力・語彙力・表現力の育成を図るという授業改善の手がかりを得ることができた。今後は、授業の中に学習の成果を互いに伝え合ったり、助言しあったりする場面を作り、さらに自己表現力を伸ばす指導を工夫していきたい。